

第11分科会

研究主題

運動の楽しさを自らの力で追及する 児童生徒の姿をめざして

—生涯にわたりスポーツに親しむことができる子どもの育成—

島根県立松江ろう学校

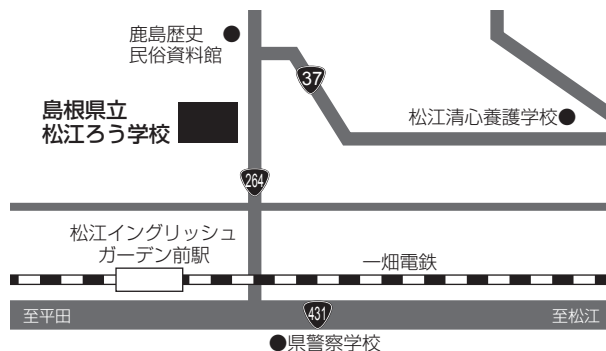
日 程

9:15	9:45	10:45	11:45	12:10	12:30	13:30	14:00	14:40	15:00	15:10
受付	公開授業① (小学部)	公開授業② (高等部)	研究協議	指導講習	昼食・休憩	研究発表	研究協議	指導講習	閉会行事	

公開授業案内

	学部・单元名	会 場
公開授業①	小学部・フットベースボール	体育館
公開授業②	高等部・選択体育	体育館

学校所在地図



交通機関

バス：一畑バス 松江駅前発
 恵曇方面 佐太神社前下車 徒歩25分
 松江駅 7:40/8:00/8:30 発

タクシー：JR松江駅からおよそ30分（4000円程度）

学校概要

学校名称	鳥根県立松江ろう学校		
校長氏名	田中 明		
学級数	幼稚部／4学級 小学部／3学級 中学部／5学級 高等部／9学級 計／21学級		
生徒数	幼稚部／6名 小学部／4名 中学部／10名 高等部／14名 計／34名		
所在地	〒690-0121 松江市古志町191-6		
電話	0852-36-7222	F A X	0852-36-7223
U R L	http://www.shimanet.ed.jp/matsurou	E - m a i l	matsurou-01@shimanet.ed.jp

【学校紹介】

本校は、明治38年5月に松江私立盲啞学校として創立され（日本における27番目の創立である）、昭和23年に鳥根県立聾学校、昭和28年に鳥根県立松江ろう学校と校名を変更し、今年度で創立104年を迎える。校舎は、宍道湖近くに位置し、佐太川や緑に囲まれた自然豊かで閑静な環境にある。

今年度は聴覚障害のある幼児児童生徒が34名在籍しており、鳥根県における聴覚障害教育の拠点として、日々の教育実践を行っている。鳥根県東部を校区としており、幼児児童生徒の出身地は、松江市や出雲市、雲南市、遠くは米子市と幅広い。そのため寄宿舎が隣接しており、13名の幼児児童生徒が在舎している。通学生については、電車やスクールバス等を利用している。

地域のセンター的役割として、平成13年からの通級指導教室の設置にあわせて「ほかほか支援室」を設立し、鳥根県東部の聴覚障害のある幼児児童生徒やその在籍園・校への支援も行っている。毎年開催している公開研修会には、近隣の小中学校や幼稚園・保育園、または医療福祉関係者から多数の参加がある。

本校の在籍幼児児童生徒の状況では、近年、特に中・高等部において重複障害のある児童生徒の割合が高くなっており、今年度は全校の幼児児童生徒の総数の約半数弱を占めている。また、聴覚障害以外のコミュニケーションや学習の困難さを抱える子どもたちも増加しており、これまでより一層、子どもたちの実態や個々の教育的ニーズに合わせた指導や支援の工夫に努めている状況である。

本校の教育目標におけるめざす子ども像は、①元気で明るい子②すすんで勉強する子③みんなと仲良くする子④よろこんで働く子である。これらの子どもの姿の実現に向けて、今年度は以下のような重点目標を掲げ、実践に取り組んでいる。

- (1) 心身の健康を大切にした教育の推進
- (2) 夢を描き、その実現に向かっていく教育の推進
- (3) 創造性や個性の基礎となる感性を育む教育の推進
- (4) すべての子どもたちの学びを支える取り組みの推進

研究主題

運動の楽しさを自らの力で追求する児童生徒の姿をめざして －生涯にわたりスポーツに親しむことができる子どもの育成－

島根県立松江ろう学校

1 研究主題の設定理由

本校の子どもたちは、学部や学年を問わず身体を動かすことを好み、休み時間に声をかけあって友だちと一緒に遊ぶ姿が多く見られる。しかし、体育科の授業（ここでは運動領域を取り上げる）や部活動の様子、幼稚部での遊びの様子等を見ると、全体的に体力不足が伺え、持久力のない子どもが多い傾向にある。また、身体をうまく使う調整力の弱い子どもも多い。他の障害をあわせ有する幼児児童生徒が多く在籍する昨今、この持久力や調整力が弱い子どもがさらに増加傾向にあるように感じられる。そのことは、小学部・中学部・高等部（本科・専攻科）で毎年行っている新体力テストの結果からも明らかで、全国平均より低いデータが出ている。さらに、個人競技では技術やタイムの向上をねらうことができやすいが、集団競技等は聴覚障害があるために苦手とする子どもが多いということが挙げられる。生活面を見ても、学校に隣接している寄宿舎に入舎している児童生徒も多く、公共交通機関やスクールバスの利用等により、登下校時に歩く機会が少ないことや、放課後の遊びも限られていること等も一因ではないかと考えられる。また、本校は幼児児童生徒が少なく、年齢や学年の異なる集団で遊びや体育の授業を行っているため、競争意識が低く、向上心が育ちにくい面もあり、個々の力を自ら引き上げようとする学習環境に乏しいということも要因として考えられる。

上記のような本校の実態から、幼児児童生徒が運動に親しむ資質や能力を身につけ、体力を高めることができるよう学校体育の充実を図り、長期的な低下傾向にある体力・運動能力の向上をめざす必要があると考える。そのためには、幼児児童生徒が共に学ぶ本校では、学校内外（学校・家庭・寄宿舎等）での多角的な視点に立って個々の実態をつかみ、必要とされる課題を厳選しながら計画的に学習に盛り込んでいく必要がある。また、学部を越えた縦割りのグループで研究体制を組織し、情報交換や共通認識の下に、幼稚部～高等部までの一貫した教育を行うことが望ましい。そして、各学部でめざす姿を見据えながら、発達段階や障害の状況に応じた指導の工夫を行い、担当者を中心に授業内容を検討していくことで、個々のニーズに合わせた体育学習が展開できるものと思われる。身体を動かすことを好み、友だちと活動を共にする喜びを感じながら学習できる体制を整えていくことで、生涯にわたりスポーツに親しんでいけるような力を育てていきたい。

～これまでの研究の経緯～

【平成19年度】

- ・学部（幼・小・中・高）の実践を互いに情報交換し、学部で大事にしていることやねらいを共通理解することができた。また、これまでの取組で培った力を、次の学部に引き継ぐための一貫した指導を模索していく手がかりを得ることができた。そして、各学部での有効な指導方法や教材について共有化を図り、少人数を生かしたきめ細やかな配慮やグループ構成の工夫、記録やルール等の掲示や視覚教材の工夫という点について、担当者で授業内容を考えていくというグループ内の共通理解を図ることができた。

【平成20年度】

- ・「第48回全国学校体育研究大会」島根県大会に向け、主に小学部・高等部で研究グループを結成し、授業公開・研究協議を行った。その際に指導助言者として外部講師を迎え、研究を深めることができた。大会主題である「確かな知識と技能を身につけ、学ぶ喜びが味わえる体育学

習」を受け、研究発表校である石見養護学校との共通のテーマを話し合い、平成20年度より『運動の楽しさを自らの力で追求する幼児児童生徒の姿をめざして』を研究主題に取り組んだ。

【平成21年度】

- ・運動の楽しさやスポーツの魅力を十分に体験することを礎としながら、それぞれの障害の特性を考慮した授業実践に取り組み、引き続き研究主題に基づいて研究を進めている。

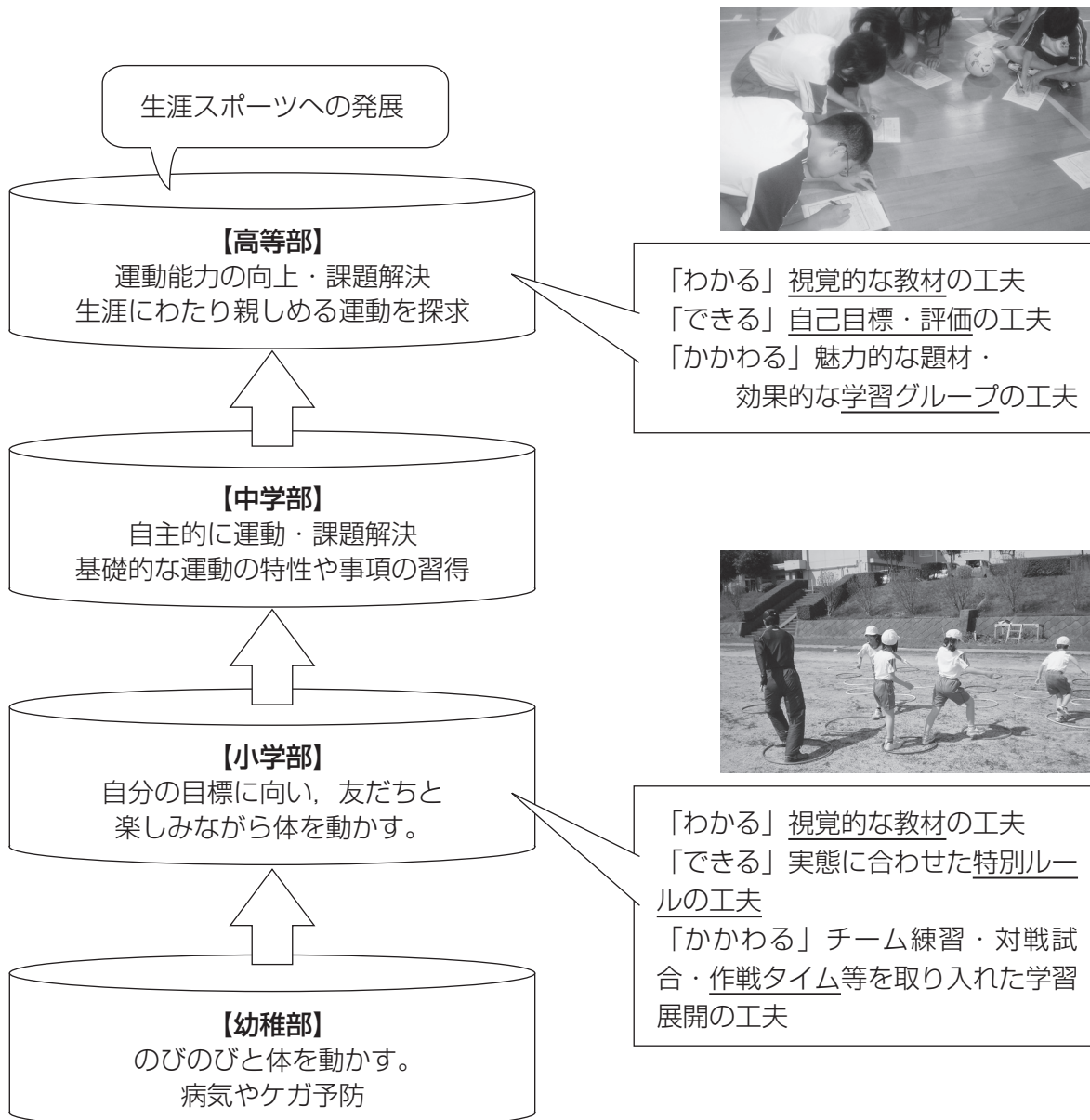
2 めざす姿

～めざす幼児児童生徒像～

- ・自ら体力の向上をめざし、身体を動かすことを楽しみながら、生涯にわたり好きなスポーツに親しむことができるようになって欲しい。そのためには、体育の学習だけでなく学校生活全般においても、心身ともに健康的なからだ作りや各種運動技能等を身につけていく必要がある。その過程の中で、一人一人の幼児児童生徒を見つめ、「わかる」「できる」「かかわる」支援を工夫し、本校のめざす子ども像に近づけていきたい。

3 研究の視点

- ・運動の楽しさを自らの力で追求する幼児児童生徒を育てるために、一人一人が集団の中で運動を楽しむための授業作りに視点を当てて研究している。



4 研究の実践

(1) 小学部「フットベースボール」(平成20年度の実践から)

①児童の実態

【学習グループ】 1年生の男児1名、女児1名、2年生の女児1名、4年生の女児1名、6年生の男児2名、女児1名の計7名で構成(聴覚障害だけでなく知的障害をあわせ有する児童が1名)

【コミュニケーション手段】 主に口話にあわせて手話や指文字によるコミュニケーション

(仲間意識をもってお互いに積極的に話をしている様子が見られる。)

【学習体制】 普段はそれぞれ個別学習を行っていることが多いが、体育では、1～6年生の小学部全員で取り組んでいる。年齢差や実態差があるが、これは集団で行うことによって培えるチームプレーの向上や協調性を養うことを目指す上で、効果的な学習グループである。

【学習に対する意欲】 各種運動技能においては、動きにぎこちなさや新しい活動に慎重になりすぎて余分な力が入ってしまう様子などが見られる。児童たちは体を動かすことを好み、学習に対して意欲的に取り組む姿が見られる。

②題材について

フットベースボールは、「投げる」「捕る」「蹴る」などの全身を使ったさまざまな動きがある体育的な活動としては魅力のある競技である。また、攻防が完全に分かれていることから相手チームの動きをよく見ることができ、チーム内でも動きについて話し合いや相談をする時間を設けることができる。このように、お互いにプレーの確認ができることで、友だちの良かった点を知り、自分の次への課題を見つけやすい題材である。そして、チームで励まし合ったり意見を聞いたりする場面も必然的にでき、次への活動の見通しがもちやすくなったり、チームプレーの大切さを築いたりする上でも有効であると考えている。また、野球型のゲームスポーツであるフットベースボールに触れ、体験することを通して、テレビ等でもスポーツ観戦をする楽しみが増え、生涯スポーツとして取り組もうとする姿勢や基礎ができるものと考えている。

③指導にあたって

児童には、自分や友だちの身体に気づき(身体の動きやコンディション)、しっかりと身体を動かして欲しいと願っている。個人、ペア、グループ、全員など、様々なグループを組み入れながら学習を展開していく。その中で、楽しい雰囲気の中で進めていけるように、お互いに声をかけ合い、対戦に向けてみんなで協力して戦っていくという志気を高めていけるように支援する。

【学習を進めていく上での配慮・留意点】

視覚的教材 → わかる

ルールが簡単 → できる

作戦タイム → かかわる

・特別ルールの工夫(理解・運動量を確保など)

・視覚的な教材の工夫

(作戦ボードの工夫、大型デジタルタイマーの効果的な使用など)

・柔らかく適度な大きさと重量のボールを使用(安全面の確保など)

・モデルの提示の仕方(技術向上に繋がるアドバイスや動き)

・学習効果のあがるグルーピングの工夫(話し合い・かかわりなど)

お互いのかかわり合いを大切にしながら、年齢差や個人技術差がそのまま得点に結びつかないような工夫や、勝敗に関係なく双方のチームの頑張りを褒めていく時間を大切にする。



④学習の経過と児童の変容

- ・「フットベースボール」(全10時間：平成20年度)
- ・指導計画 第一次「フットベースボールを経験しよう」(4時間)
- 第二次「作戦を立てて試合をしよう」(6時間)

第一次では、主にフットベースボールにかかわる様々な動きの習得をねらい、第二次では、チームプレーとして個々の動きがチームプレーに生かせる段階として分けて行った。低学年の児童や重複障害を併せ有する児童が集団の過半数を占めるため、試合上のルールはできるだけ簡単で分かりやすいものを用意し、内容や活動が確認できる視覚的な教材を準備した。練習や試合を重ねていくうちに、児童たちは、自分→友だち→チームへと目が向けられるようになっていった。これは、個人的な技術や技能の向上を目指すだけではなく、友だちの上達や頑張りにも注目し、チームの一員としての意識が次第に高まっていったからではないかと思われる。試合中では「頑張れ～!」という応援の言葉だけでなく、「いいぞ～〇〇さん!」など、さらにやる気を喚起する声かけや「どんまい」など友だちの気持ちを考えた声かけも次第に増えていった。第二次の後半にさしかかると、チームとしての団結力がさらに増し、みんなで相談したり、協力したりしながら試合を進め、教師のサポートがなくても自然な流れで学習が展開されるようになった。

⑤考察

『わかる』：情報の確保

《作戦ボードの工夫》

短時間の作戦タイムでは、口話や手話だけでは話に行き違いが生じたり、低学年の児童が上手く自分の考えを説明できなかったりするために、フットベースボールのコートを描いた作戦ボードを準備した。作戦ボードを使って(顔写真を動かしながら等)打順や守備隊形など顔写真を移動させながら話し合えるようにした。作戦タイム中に、ボードや顔写真等があることで、上手く説明できない箇所を補うことができ、お互いの意志の疎通がスムーズに確実にできる手助けとなっていた。



《大型デジタルタイマーの設置》

聴覚に障害がある児童に対し、視覚的な教材は学習をスムーズに進めていく上でも、指導する上でも有効であることは言うまでもない。大型デジタルタイマーも同様で、活動の開始と終了の時間を示し、タイマーで残りの時間をカウントしていくことで、活動中でも児童がそれぞれ時間を確認し、練習や作戦タイムの終わりを意識しながら活動できるようになった。

《集合の場所・合図》

始めや終わりのあいさつ、ウォーミングアップ、練習、試合等は意図的に場所を変え、次の活動に向けての切り替えを意識しやすくした。集合の際には「かけ足で集合する」「中心の児童に合わせる」など繰り返し行ったことで、「合図によって急いで集合できる」(主に低学年児童)「自分の役割を意識して整列の中心となる」(主に高学年児童)ことができるようになっていった。また、集合の合図には笛ではなく小太鼓を利用した。小太鼓は、聴覚に障害のある児童でも分かりやすい音なので、合図となる小太鼓を叩くと活動中であってもすぐに反応し、指定された場所に集合できるようになった。

《教師の声かけ》

必要に応じて教師がモデルをしたり、声をかけたりした。話の中で難しい言葉が出てきた際には、具体的にわかりやすい言葉に置き換えて、下記のように説明を加え伝えた。

(高学年児童) 「中継プレーができてアウトにできてよかった」

(低学年児童) 「中継プレーって何？」

(教師) 「〇〇さんから●●さんへパス。そして、キャッチャーの△△さんにパスしてアウト！」

また、個々の動きを具体的に取り上げ、ホワイトボードに図や顔写真を動かしながら、下記のように低学年の児童にもわかりやすく伝えた。

「〇〇さん、とったらすぐに振り向いて、●●さんにパスできたね。」

「●●さん、『〇〇さん、こっち！』と名前を呼んであげて、〇〇さんはパスしやすかったと思うよ。」

「キャッチャーの△△さん、●●さんに手を振って場所を教えてあげられていてよかったよ。」

学習の振り返りだけでなく、その都度取り上げてかみ砕いて説明を加えていくことで、児童はどこがどのようによかったのかが具体的にわかり、次への段階や動きに繋がっていった。

『できる』特設ルールの設定

《実態や技術向上に合わせたルール設定》

児童たちの実態から、通常のフットベースボールのルールでは、内容を理解する上でも、人数的にも難しい。この題材の良さを残しながら、運動量を確保したり、わかりやすく改善したりしていくためには、実態に合った簡略化したルールが必要となってくる。そこで、「ボールを置いて蹴る」、「チーム全員が蹴ったら攻守交代」、「蹴ったらベース（コーン）を回ってホームに戻る」、など簡単なルールで分かりやすくして実施した。このように実態に合わせて特別なルールを設定したことで、みんなが理解して活動し、次に何をすべきか見通しをもって取り組めるようになっていった。また、技術向上に合わせて、ベースの距離を延ばす等して、ルールを柔軟に変更したことにより、運動量を確保することもできた。

《安全で安心して学習できる環境作り》

安全面において、本題材であるフットベースボールでは、ある程度重量があり弾力のある柔らかいボールを使用した。通常のフットベースボールであると、低学年にとってはスピードが速く、「こわい」「痛い」などの恐怖心をもってしまい、動きに制限を与えてしまう。また、実際に身体に当たってしまうとその衝撃は大きく大変危険である。今回、安全面に留意したボールで活動した結果、全員が恐怖心をもたず、思い切ってボールに向かえる状況を確認することができた。安全に安心して学習できる環境を整えることで、児童が積極的に活動し、意欲的に取り組める場面が多く見られた。

『かかわる』：集団の必要性

《話し合い活動（作戦タイム）》

学年差や実態差の大きい集団が同じ題材で活動するため配慮事項も多いが、集団を組むことでチームワークの向上や話し合い活動など、集団ゲームとしてのねらいをもって学習を展開していくことができる。このことは、作戦タイムの様子からも看取できた。6年生は、話をまとめる司会者的な役割を果たしたり、下学年の児童へのアドバイスをしたりして、和やかな雰囲気の中で下級生を常にリードして進めていた。下級生は、話を聞いたり理解したりするだけでなく、自分の意見を積極的に発言していた。このような活動は、お互いの動きを見合い、声をかけ合う場面を設定した学習集団であるからこそ見られた姿である。



《モデル（見本・目標）》

学年差や実態差が大きいことでの利点もあった。それは、低学年の児童は教師からだけでなく、高学年の児童からもアドバイスを受けて、動きを模倣したりして、モデルとなる対象者が

できたことである。「投げる」「蹴る」「捕る」などの技術面、「作戦タイム」での話し合いの進め方、「準備・片づけ」の手順など、高学年の児童がよき見本となり低学年の目標となった。逆に、高学年の児童にとっては、アドバイスすることで基本的な動きを改めて確認できたり、良きお兄さんお姉さん役を果たそうと頑張ったりする効果もあった。

《かかわり合い》

本題材で、みんなが協力し楽しみながら活動する姿が見られたのは、お互いにかかわり合いをもちながら活動できた結果ではないかと思われる。試合中には、チームメイトが蹴っている時に応援したり励ましあったりする姿も見られた。また、結果に一喜一憂したり、守備で中継プレーがうまくいってアウトにできたときは、チームみんなでジャンプして喜んだりする姿も見られた。このような姿も、集団をつくって活動をしたことでしか見られない姿である。

《学習の振り返り》

授業の最後には必ず児童が練習や試合を振り返って、よかった点などを発表し合う時間を設けた。一人一人を賞賛し、よかったところを全体の場で確認することで、児童たちの意欲はさらに増していった。この振り返りにより、自分や友だちのよかったところを賞賛し合い、また、自分のチームだけでなく相手チームのよかったところも全員で発表し合うことで、それぞれの頑張りを認め合い、技術の向上に対しての喜びを共有し合うことができた。さらに、教師は、児童たちの振り返り後、次の技術のステップになる点について触れ、よりよくするためのヒントを告げたり、勝つための秘密を示唆したりすることで、次時の学習への期待感を高めていった。このように、技術の向上を図るためには、教師が現在の児童の技術レベルを把握し、つきたい力を見据え、主体的に動けるような声かけの工夫をしていく必要がある。



平成21年度の取り組み

平成20年度は、7名の児童と3名の指導者で学習を進めていった。学年も高学年（3名）・中学年（1名）・低学年（3名）と分かれており、チーム分けは縦割りで、チームのリーダーとなる児童、動きの要となる運動能力の高い児童、周囲の動きを見ながら自分なりのペースで楽しみながら活動ができる児童など、それぞれ役割をもって一緒に協力して活動し、みんなで相談しながら進めていくことができた。しかし、今年度（平成21年度）は、高学年が3名卒業した後、新入生の入学もなかったため、在校生は4名となった。集団をつくっても最大で4名である現状の中、どのような工夫や支援で集団ゲームを楽しみながら取り組んでいけるかについて、体育担当で話し合いを重ねている。

学習を進めていく上での配慮・留意点については、引き続き意識して学習を展開していくが、練習計画や学習グループについては、実態に合わせて変更していく必要がある。指導計画については、低学年に合わせて「蹴る」「捕る」「投げる」の基礎的な動きを前半にしっかりと押さえしていきたい。チーム分けについては、教師がサポーターとしてチームに所属するのではなく、「児童チーム（4名）VS教師チーム（AT2名）」に完全に分かれて対戦していく形をとる。そうすることで「みんなで協力して、先生には絶対に負けないぞ!」という気持ちを引き出し、教師は練習でも試合でもよき手本となり、卒業した高学年のかわりにモデルとしての役割ももって学習を展開していきたい。

(2) 高等部「選択制体育」(平成20年度の実践から)

①生徒の実態

【学習グループ】

1年生4名(男子3名,女子1名),2年生6名(男子1名,女子5名),3年生6名(男子1名,女子5名),専攻科1名(男子),計17名(男子6名,女子11名)で構成されている。
(重複障害をあわせ有する生徒が4名)

【コミュニケーション手段】

主に口話にあわせて手話や指文字によるコミュニケーション

【学習体制】

高等部の体育は,各種目の基礎・基本を中心とした授業を行う1年4名(男子3名,女子1名)と2年6名(男子1名,女子5名)の計10名と,基礎・基本を基に,さらなる技術レベル向上をめざした授業を行う,3年6名(男子1名,女子5名)と専攻科1名(男子),計7名の2つのグループで構成されている。2学期に,2グループ合同で選択制体育に取り組んだ。

【学習に対する意欲】

高等部生は,平素から生徒会活動,部活動等において,行動を共にすることが多く,3年生は常に下級生を指導するリーダー的役割を担っている。下級生も上級生と仲がよく,協力する姿勢が見られる。体育の授業を楽しみにしており,身体を動かすことを好む生徒が大半である。準備,後片づけ,補強運動などそれぞれの活動において指示されたことには意欲的に取り組むことができるが,主体的に行動することは困難である。

②題材について

私たちは生徒たちが卒業した後もこれまでの学校生活の中で得た力を生かし,自分の好きなスポーツを楽しんでほしいと願っている。それが,それぞれの豊かな生活にも繋がっていくのではないだろうか。そこで,数種の種目の中から自分のやってみたい種目,興味のある種目を選択し,同じ気持ちの仲間同士で行う選択制体育に取り組むことで,「生涯にわたりスポーツに親しむ力」を育てることができると考えた。運動の楽しさや喜びを味わうことができるだけでなく,自己の能力に応じて運動の課題を自ら解決することによって得られる達成感,成就感を体得することもできる。受け身的な授業から,自主的・積極的な授業へと成果が期待できると共に,自分のもっている運動能力をより発揮できると思われる。また,グループ内での協力体制を高めることも期待できる。生徒一人ひとりが自ら選び,自ら学び,主体的に行動する力を養うことで卒業後もスポーツに親しむことのできる基礎作りとなる題材である。

③指導にあたって

選択制体育の種目は,生徒の希望も取り入れ,卓球,バドミントン,バスケットを考案した。各種目を数回体験した後,やりたい種目のアンケートを取ったところ,種目によって人数の格差が見られたり,体育館の限られたスペースでの配分がうまくいかなかったりするなどの課題が浮き彫りになった。そのため予定を変更し,それぞれの種目をしっかり経験し,グループ分けした中でチームの課題や自己の能力に応じた課題の解決をめざし,計画的な練習の仕方やゲームの仕方を工夫することに焦点をあてた指導を行うことにした。

ルールについても,各グループで自分たちの技能に合ったものを考えさせるなどして,生徒全員が楽しめるものをめざすことにした。最終目標としては,生徒一人一人が自己の技術レベルに応じた目標を設定し,その目標達成に向けて学習を進めていけるようになればと期待している。

【学習を進めていく上での配慮・留意点】

視覚的教材 → わかる 自己目標・評価 → できる

生徒主導の学習展開・実態に応じた特別ルールの作成 → かかわる

- ・グループ編成の工夫（人数・能力・話し合い・かかわりなど）
- ・自分たちの技能に応じた攻防とルールの工夫（理解・運動量の確保など）
- ・導入段階で体力づくり運動（運動量の確保・体力向上）
- ・一斉指導の中での個別の工夫（技術向上に繋がるアドバイスや動き）
- ・学習カードの活用（協力・話し合い・かかわりなど）
- ・視覚的な教材の工夫（ビデオでの確認、デジタルタイマーの使用など）

④学習の経過と生徒の変容

「選択制体育」（全24時間）	
指導計画	第一次「球技三種の体験」（3時間）
	第二次「卓球」（5時間）
	第三次「バトミントン」（8時間）
	第四次「バスケットボール」（8時間）
	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎技能 ・ゲーム ・試合

第一次では三種目を体験させた。第二次よりグループを編成し、まず教師とともに授業を組み立て、「できた・やれた」という達成感が得られる授業をめざした。この段階では、自分たちで練習計画を立案するという経験が皆無であったからである。そして、第三次より初めてグループごとに練習計画を立案し、それに沿って行うという方法をとった。計画の立案は3年生が中心となって考えることができるよう、週に1時間多い3年生のみ体育の時間を活用した。生徒自身が主体となって進めていく活動に最初は戸惑う生徒の姿が多々見られた。しかし、少しずつ伝えるための視覚的な手立てを自分たちで工夫しようとするなど主体的な姿も時々見られるようになった。また、ゲームを通して、勝つためにはどうしたらよいのか、技術面、作戦面でそれぞれの生徒が工夫しようとする姿も見られるようになった。



⑥考察

わかる

《ルールの工夫》

「長くラリーを続ける」、「正式に近いルールで試合をする」等それぞれのグループで、試合ルールは柔軟に考案することができた。自分たちに合ったルールでプレーすることで、運動の楽しさを感じ、またやってみようという意欲を持続することができたように感じる。

できる

《体力づくり》

本校生徒の体力不足を改善するために、今年度は、ランニング、腕立て伏せ、腹筋運動、背筋運動、ジャンピングスクワットの種目を授業の導入部分に取り入れ指導を続けることにした。

指導当初はほとんどできなかった生徒も少しずつできるようになるとともに、一連の運動を消化する時間も短くなった。今後も継続して実施していく中で、支援を要する生徒への具体的なかわり方を検討していく必要がある。

《学習カードの活用》

生徒一人一人が毎時間、自分の目標をもって授業に望めるように、学習カードを活用し、自己の活動について考えさせた。しかし、記入するのに時間を要したり、書けなかったりした生徒もいたので、それぞれの生徒の実態に応じた内容のカードを作成する必要がある。今後は生徒一人一人に自己計画を立てさせ、見通しをもって活動できるよう工夫した学習カードを作ることと、カード記入の時間を事前、あるいは事後にもつようにするなど考えていく必要がある。

かかわる

《グループ編成》

本題材では、合同授業としたことで技術レベル別の3つのグループを作って活動した。同質の

レベル集団をつくったことで、それぞれの生徒の課題が一致しやすく問題解決に向けて取り組みやすかったグループもあった。そのようなグループは楽しみながら取り組み、運動量の確保もできていた。しかし、技術レベル別のグループを編成した際に、技能の高くないグループは支援を要する生徒が多く、試合が成立しにくく運動の楽しさを体感するまでに至らないなどの課題が多々見られた。来年度のグループ編成については、支援を要する生徒が集中しないよう配慮することが必要である。併せて、ATのかかわり方を探っていく必要がある。

○21年度へ向けて

20年度の実践を基盤として、21年度は本格的に選択体育に取り組み始めている。生徒数も14名と減少したため高等部全員で授業を展開している。また、視覚障害のある生徒も入学し、ますます個に応じた支援の必要な生徒が増加するとともに能力差が広がりつつある。そのため、本年度は指導教員を3名から5名に増やし、支援の必要な生徒へも配慮できる体制にした。学習意欲の基盤となる種目選定は、年度当初に生徒にアンケートを実施することで検討を行った。種目数は本校の体育館の広さ、また選択の際に考えやすい数であること、競技に必要な最低の人数等を視点に入れることで、二種目が妥当なのではないかと考えた。また生徒の希望は卓球、サッカー、バドミントン、バレー等の意見が多かったので、この中から、視覚障害のある生徒も工夫すれば楽しむことのできる卓球と、体育館の半面で実施可能なサッカー（フットサル）の二種目を選択した。サッカーについては、昨年度は取り組んでいなかったが、生徒の希望が多かったことと比較的少ない人数でも試合が可能な球技だったため取り上げることにした。卓球は個人あるいは二人、サッカーは数名のチームプレーができるという点でも種目の特徴が異なっており、選択の際の観点にもなりやすかった。



昨年度の課題でもあった自己目標・評価の工夫としては、個に応じた自己評価表とグループ活動ノートの作成を行うことにした。記入に時間がかかる生徒には、選択方式の評価表を取り入れるなど試行錯誤を重ねている。視覚的な教材は、生徒自身が伝達する中で伝わらない体験を経験することで自ら工夫できるように指導していきたいと考えている。支援の必要な生徒については、ATの教員のかかわり方を工夫することで、技能面の向上や友だちとのかかわりを広げていきたい。特に視覚障害のある生徒については、どのように工夫すれば参加し楽しめるものになるか考えていく過程で、少しずつ自分のことを客観的に見つめたり、友だちに伝えたりすることができるようになることを願っている。また、盲学校と連携をとりながら、障害の認識を深めていく学習にも結びつけていきたいと考えている。まだ、十分な手立てがそろっていないが、試行錯誤を重ねていく中で、生徒の学びを支え、生涯を通じて継続的に運動に親しめる資質や能力を育てることをめざしていききたい。

5 研究のまとめ

〈平成19年度〉各学部の実態や課題を出し合い、「運動の楽しさを自らの力で追求する幼児児童生徒」をめざす子ども像として、各学部で実践を積み上げた。学部をこえた縦割りの研究グループで情報交換や共通理解を図ったことで、本校のもつ課題や全体像が見えてきた。

〈平成20年度〉幼稚部、小学部、中学部、高等部、それぞれのめざす姿を再確認し、幼稚部～高等部まで一貫した教育方針や理念をもって取り組んだ。そして、休憩時の遊びの様子や学習の様子から、個に合わせた効果的な支援は何かを模索しながら実践に結びつけていくことができた。

〈平成21年度〉研究の実践にもあるように、小学部と高等部の実践を中心に研究を進め、研究授業や研究協議を重ねている。学部が違えば学習の進め方やねらいも違ってくるが、発達段階に応じた題材の選択や効果的な指導方法を探っていくことの必要性を改めて認識し、よりよい学習の展開ができるように継続して研究を進めている。

小学部や高等部だけでなく、幼稚部や中学部にも共通して見られた姿が、「楽しみながら身体を動かす」ところにあった。幼稚部は、声だし、スキップ、駆け足の3点をポイントにした「わっはっは体操」の取組、リレーゲーム・鬼ごっこなどのルールのある遊び、散歩の取り組みを継続的に行っている。活動の積み重ねにより、体操を覚え自信をもって次の動きへ身体を動かすことができたり、遊びの中で知らず知らずのうちに自然と身体を動かしたり、季節を感じながら景色の移り変わりを楽しんだりと様々な活動に楽しみながら参加している姿が見られた。

中学部では、整列、集合や挨拶、体操隊形などを意識して取り組み、集団活動におけるルールやマナーの習得を大切にしながら、各種運動に触れる機会を数多く設けた。その中で実態に合わせた活動内容やルールにより、生徒が自発的に身体を動かすことができるように支援した。自発的な活動から、生徒たちは自分たちで協力しながら進め、楽しみながら自然と身体を動かすことが増えていった。そして、高等部の選択体育に向けての活動へと繋がり、学習の基盤や素地作りとして位置づけることができた。

上述したような各学部での成果は、本グループの研究の主眼である「運動の楽しさを自らの力で追求する幼児児童生徒の姿をめざして」のテーマに迫ることができたことを示している。このように、各学部のめざす子ども像をしっかりと見据え、一貫した方針を掲げて研究テーマに迫ることができたのは、平成19年度から組織した縦割りの研究グループ（体育担当者や体づくりを担当している者で組織）での取り組みの積み上げによるものであると考える。

また、学習場面だけでなく、隣接する寄宿舍での生活や休憩時間などにも目を向け、楽しく身体を動かすことができるように環境を整備し、興味や関心のある動きを見逃さずに学習に組み入れていけるように努めていきたい。このように、体育学習の中での運動やスポーツだけを身体的な動きとしてとらえるのではなく、遊びにおいても身体的な「動き」としてとらえ、授業とリンクさせながら本校のめざす子ども像に近づけていきたい。そのためには、多角的な視点で幼児児童生徒の実態を的確にとらえ、新しい視点で題材の選定や工夫をしていく必要がある。そして、より効果的な指導方法、学習内容、展開の仕方等を模索しながら、さらなる授業の充実を図っていきたい。

研究主題

運動の楽しさを自らの力で追求する児童生徒の姿をめざして －自ら運動を楽しむ姿をめざした授業づくり－

島根県立石見養護学校

1 本校の概要

本校は小学部4名、中学部9名、高等部27名の計40名の特別支援学校（知的障害部門）である。知的障害部門の中では県下でも2番目に小さい特別支援学校であり、様々な学習場面において小集団の活動が多い。また、近年中学部、高等部は、他校の特別支援学級や通常の学級からの入学生もおり、一人一人の生徒の実態の幅も広い。体育の授業は学部単位で取り組んでいるが、日々の授業においても集団が小さいことや実態の幅が広いことを踏まえ、個々の支援やグルーピングを工夫し、児童生徒一人一人の運動能力に応じた取り組みができるように配慮を行っている。

2 研究のねらい

自ら身体を動かし、運動の楽しさを知ることで、本校の児童生徒には生涯にわたって運動に親しみ健康な生活を送ってほしいと願っている。しかし、本校の児童生徒は、自ら運動をして健康な体づくりを意識したり、運動を余暇活動として楽しもうとしたりする力は弱い面がある。また人へのかかわりの面でそれぞれの児童生徒に課題があり、集団で楽しむ運動の経験が少ないと感じている。そこで集団での運動経験を積み、人と競ったり協力したりする楽しさを味わうことで自ら運動を楽しむ姿を引き出したい、と考えた。しかし、本校では集団が小さかったり集団の実態差が幅広かったりするために、集団の良さを生かすことができにくい一面もある。そこで、集団で運動を楽しむための基礎的な運動の習得や態度を育てる指導、実態差のある集団の中で一人一人が様々な運動を通して体力の向上を図ることに視点をあてることにした。児童生徒一人一人の実態の把握を元に、それぞれの集団の良さを生かした授業改善に取り組み、自ら運動を楽しむ姿を育てていきたい。

3 学部の実践

(1) 平成20年度 年間指導計画

○小学部

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学 習 内 容	準備運動（ランニング、後ろ歩き、横歩き、手押し車、ケンケンパ、腹ばい歩き、柔軟等）											
	運動遊び1 (平均台、手押し車等)				運動遊び4 (巧技台からのジャンプ、ブランコ、表現遊び等)							
	運動遊び2 (低い跳び箱の乗り降り、 腹ばいでのスクーターボード等)						運動遊び5 (マット、表現遊び、ゴム遊び等)					
	運動遊び3 (ボール運動<投げる、受ける>、ろくぼくのぼり等)											
	プール学習（近隣の施設にて年間10～16回）											

○中学部

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学 習 内 容	4分間走、準備体操、壁タッチ走（サイドステップ、手押し車等）											
	ボール運動											
	体育祭競技練習	ミニ運動会		(サーキット運動)				器具を使った運動				
	(大玉転がし、ボディボード等)											
	プール学習（近隣の施設にて年間16回）											
	(サーキット運動等)											

○高等部

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学 習 内 容	陸上、体力テスト											
	グループ別 ・ポートボール又はバスケットボール ・卓球											
	体育祭競技練習	サッカー（交流大会に向けて）				選択制体育		グループ別				
	水泳（各学年で実施）											
	スナッグゴルフ				バドミントン		マット運動		サッカー			
	柔道											

(2) 実践事例

【小学部】

①題材「楽しく身体を動かそう！」（年間）

②実態

4名が在籍しているが、2名は自立活動主体の教育課程を編成しており、体育は2名による学習である。少人数であり、大きな集団で運動する機会が少ないため、集団の渦の中で、自然に獲得できると思われる運動のイメージをもちにくい面がある。しかし、動きのペースや運動課題が似ている2名の実態にあった授業展開ができると考え、今年度は2名で体育を学習している。2名とも走る、跳ぶ、自分の身体を支える、といった基礎的な運動の経験が不足している。また、そのことから運動に苦手意識をもっていたり、新しい活動を怖がったりする面がある。様々な運動を体験したり、発達に応じた動きを獲得したりしていくことで、運動経験を広げ、運動する楽しさを知ってほしい子どもたちである。

③題材設定の理由

運動遊びを通して「いろいろな運動や動きを獲得してほしい」「『できた!』という達成感を得ることで運動の楽しさを感じてほしい」と考えている。新しい動きや運動の獲得は、発達の面にも深いかわりがあり、一人一人の成長にとって欠かせないものである。また、運動遊びでは一緒に活動する中で、児童がお互いを見合ったり、競ったりかかわったりする場面を設定できる。そのようなかわりの中で、「もう一回」「自分がやりたい」などの意欲を育てたり、ルールの理解を自然に学んだりすることができると考えている。運動遊びを通して、集団で運動をするための基礎的な運動の習得や態度を育てていきたい。

④題材のねらい

- 様々な動きや運動を経験し、意欲的に身体を動かす。
- いろいろな器械器具を使った遊びや表現遊びを楽しんでする。
- 簡単な合図や指示に従って、楽しく運動をする。

⑤授業の構成

活動	活動内容	時間
準備体操	①ランニング（年間）②後ろ歩き ③横歩き ④手押し車 ⑤あひる歩き ⑥両足ジャンプ ⑦ケンケンパ ⑧かめ（腹ばい歩き） ⑨ポーズの模倣 ⑩リズム遊び ⑪柔軟体操	15分間 （4, 5項目 ピックアップ して）
本題材 * 走る, 跳ぶ等の基本的な運動 * 登る, 平均台を渡る等, 平衡 感覚を高める運動 * 友だちと一緒にする協調した 運動	・ ボールを使っての運動遊び ・ 器械器具を使っての運動遊び ・ 表現リズム遊び 等	20分間 （2, 3項目 ピックアップ して）

⑥事例

ア ～新しい動きの獲得に向けて～（準備体操）

準備運動の際にそれぞれの動きのイメージがもてる音楽を流し運動を行った。また、身体の動きは示範したり言葉を添えたりすることで、動きを意識できるようにした。1年間を通して学習の導入に行い、できるようになった動きは新しい動きに替えて変化をもたせながら取り組んだ。繰り返し取り組むうち、あひる歩き（腰をおとして足を動かして進む）や横歩き、ケンパなどが正確ではないができるようになってきた。また、それぞれの音楽を聴きわけ、自らしゃがんだり、腹ばいになったりして自分から運動に取り組む姿も多く見られるようになった。

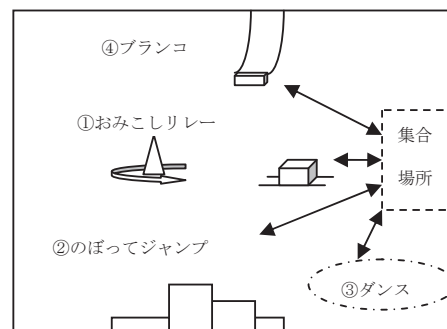
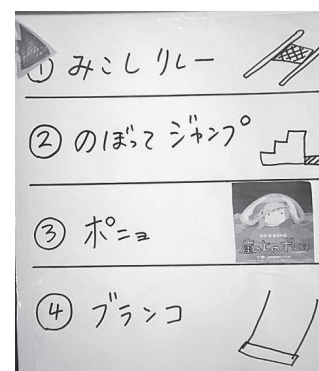
<考察>

1年間を通して獲得してほしい動きを長いスパンで取り組んだこと、そして児童の好きな音楽を取り入れたことが、活動への見通しにつながったのではないかと考える。

イ ～小集団における活動の設定の工夫～

（5～6月題材 運動遊び2より）

学習の流れの中で自然に様々な身体の動きを経験してほしいと考え、滑り台やマットなど8つの器具を配置しサーキット運動を実施した。意欲的にコーナーに向かう姿が見られたが、少しの段差や高さが怖い児童にとっては、それぞれのコーナーで運動するのに時間がかかり、1周するのがやっとであった。そのため、運動を積み重ねて動きを習得したり、やり方を自分で工夫したりといった姿には至らなかった。また、2名のペースがそれぞれで違い、児童がお互いの様子を見ることや、教員が児童の支援を共通理解することが難しかった。そこで、『運動遊び3』以降の学習では、サーキット運動ではなく3, 4の運動を設定し、1つの運動を繰り返して取り組めるようにした。それぞれの運動は絵と文字でスケジュールボードに示し、見通しがもてるようにした。改善後は友だちのがんばる姿を見て苦手な運動にも挑戦しようとする姿が見られるようになった。また、繰り返し取り組むことで徐々にできるようになる運動が増えてきた。また、スケジュールを示すと活動場所に自分から向かい、準備する姿も見られるようになった。



体育館配置図

<考察>

活動内容を絞り分かりやすく提示したことは、児童たちの見通しにつながり、自ら運動に向かう姿を引き出すことができた。また、それぞれの運動に繰り返し取り組めるようになったため、新しい動きを繰り返し経験することができた。さらに、児童が一緒に取り組むことで、互いの様子を見たり、褒めたりする場面も見られた。

ウ ～意欲のもてる支援の工夫～

(7～9月題材 運動遊び3より 「ろくぼく登り」)

ろくぼく登りは、お尻を支えるなどの支援で、少しずつ登れるようになっていくが、怖さの方が先にたつて、やめてしまう姿もあった。そこで、活動後に好きなダンスを取り入れ、その時に必要なMDをろくぼくに貼りつけておく支援をした。高さは伸ばした手の高さより少し高い所で、少しがんばれば登れる高さである。気持ちが向かうまで待ったり示範したりすると、大好きなダンスを目標に自分から登ろうとする姿が見られた。徐々に、「足だよ」「次、手だよ」などの言葉かけを受けて、スムーズに登ったり降りたりすることができるようになった。「できる」ことが分かり、自分からろくぼくに向かう姿も見られ、自信につながっていったと感じている。

運動遊び3の本題材

- ①シャトルラン (2メートルのボール運び)
- ②ジャンプ3 (釣り下がったボールにタッチ→セフティーマットへ飛び降りる)
- ③ボールキャッチ10 (キャッチボール)
- ④ろくぼく登り
- ⑤ダンス「ポニョ」 (表現リズム遊び)

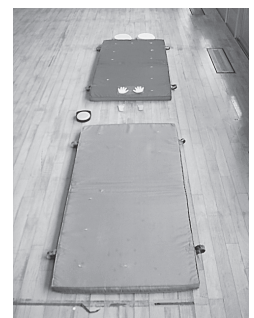
<考察>

苦手な運動に対しては不安や怖さがあるが、一方では運動がうまくできなくても、自分なりにやってみようとする姿もある。教員は、そんな児童の気持ちの動きを捉えつつかわることで、安心して取り組むことにつながっていくと感じた。また、児童が「やりたい」と思えるような活動の設定が必要である。運動する目的意識をもちにくい段階の児童は、「がんばったら好きな～ができる」という目に見える目的を示すことで、主体的に運動に向かう姿を引き出せるのではないかと考える。

エ ～視覚支援の工夫～

(1月～3月 運動遊び5 「マット運動」より)

マットの色で動きを変え、青色では横転を、赤色では前転をするようにした。横転では、転がった先にビックマック (音を録音できる機械) を置き、スイッチを押すと大好きな音楽が流れるようにし、意欲づけをした。前転では、手や足を置く場所に手形足型のシートを貼り、視覚的にも分かりやすくした。最後にメロディマットを置き、その上で立ってポーズをとると音が鳴るようにした。どこで何をするのが分かり、自分から運動に向かえた。また、シートに手や足を置くことで、少しの支援で前転することができた。



<考察>

見て何をするのが分かるようにすることで、少ない支援でも児童が意欲的に運動することができた。身体を支える手のつき方や蹴り方など、細かい支援について工夫が必要であった。

⑦まとめ

年間を通して、できるだけ様々な運動を取り入れるように計画してきた。「活動の設定の工夫」や「意欲のもてるような題材や教材の工夫」「視覚支援の工夫」など、個々の実態に沿った支援を工夫することで、少しずつではあるが、自ら身体を動かす姿や「できた」という達成感を積み重ねていくことができたのではないかと感じる。また、見通しがもてるように工夫をすることで、主体的な運動の経験だけでなく、準備や片付けも自然に取り組めるようになった。来年度は小中学部合同での体育の取り組みとなるが、できるようになったことを集団の中でも生かせる

よう、個々の支援を引き続き工夫していきたい。

【中学部】

①題材「器具を使ったサーキット運動」（1～3月）

②実態

1年生2名（男子2名）、2年生4名（男子3名、女子1名）、3年生3名（男子3名）、の計9名である。対人関係や感情・行動面で困難さのある生徒、知的な障害が重度な生徒、自閉的な傾向が強く自発語がほとんど見られない生徒、麻痺により片上下肢の運動が困難な生徒、見え方の困難さがあり空間認知が弱い生徒など、実態の幅は広い。また、運動面の実態においても運動能力が高く、特にゲーム的要素の運動を好む生徒、個別の支援を多く必要としながら運動を楽しむ生徒など、様々である。

③題材設定の理由

「器具を使った運動」は、生徒たちにとって分かりやすく、意欲的に取り組みやすい題材であると考えられる。器具を介して、どう動けばよいかということが理解しやすく、運動が分かると周囲の言葉かけや指示を受けなくても、自分から運動に向かうことができやすい。その反面、運動に苦手意識のある生徒は、器具を使った運動を怖がる面がある。しかし、個に応じて視覚的な支援やスモールステップの課題設定を行うことで、少しずつではあるが、克服することのできる題材であると考えられる。

今回は器具を使った運動を「サーキット運動」にした。「○○をしたら次のコーナーに行く」ということが目に見えて分かりやすかったり、様々な運動に取り組んだりすることができる。また、生徒が得意な運動や、習得してほしいと思う運動などを考慮し、様々な器具をバランスよく配置することで、自分から運動に向かう姿を引き出したり、新しい運動ができるようになったりするのではないかと考える。そして実態差に幅のある生徒たちであるが、個々の課題に向き合いじっくりと自分のペースで取り組むことができる、という利点もある。また、サーキットの流れが集団の流れとなり取り組みの原動力になったり、友だちの様子も見えることから意欲につながったりするなど、集団で取り組む利点もある題材である。

④題材のねらい

- 器具を使って様々な運動をする。
- 意欲的に運動し、運動の喜びを味わう。
- 一緒に活動することで、自分のがんばりや友だちのがんばりを感じる。

⑤授業の構成

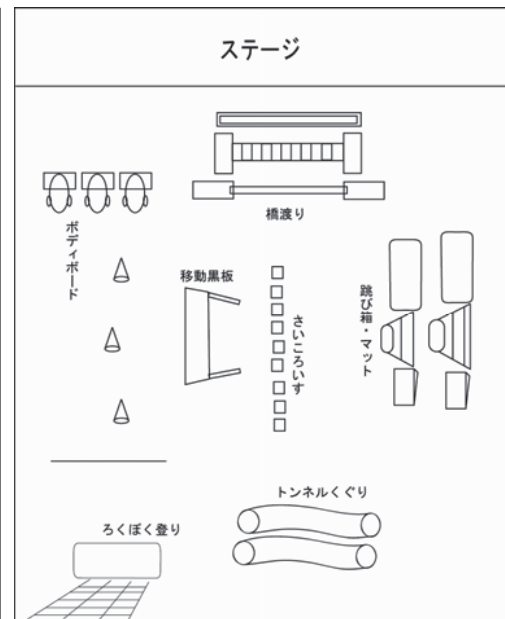
種目名	めざす運動	用具の設定
跳び箱・マット	跳び乗る、飛び降りる、転がる他	高低2種類を設置する。
橋渡り	バランスをとって進む	幅10cmの一本橋（床面設置、高さ20cmの2種類）、はしご（高さ20cm）の計3種類を設置する。
ボディボード	手で身体の動きを操作する	ジグザグ、直進を選択できるように設置する。
ろくぼく登り	目標をめざしてよじ登る	手形の絵を壁に貼り付け、高さ4段階を設置する。
トンネルくぐり	四つ這い、這って進む	2本設置する。

⑥事例

〈事例1〉生徒A

- 実 態：運動に苦手意識があり，自分から活動に向かうことが難しい。
- ねらい：自ら器具運動に向かい，運動を楽しむ。
- 支 援：跳び箱やマット運動など，恐怖心のある運動は，教員が示範をした。示範の際は手のつき方や頭の下げ方などゆっくり見せ，言葉を添えて説明をした。サーキットの中にトンネルくぐりや橋渡りなどの好きな活動を取り入れ，苦手な運動にも自然に取り組めるようにした。
- 変 容：示範を見て，跳び箱やマットに進んで取り組む姿が見られた。「～をやったら（好きな）～」という言葉かけで，苦手な運動にも取り組むようになった。

体育館会場図



〈事例2〉生徒B

- 実 態：自閉的な傾向が強く，言葉の指示だけでは何をするのかという理解が難しい。
- ねらい：運動や活動の内容を理解し，自ら運動する。
- 支 援：写真カードを使って運動の流れをボードで示した。器具を準備する際，器具と床面に同じ色のテープでマーキングをした。
- 変 容：写真カードを手がかりに，自分はどこからスタートするのかが分かることで，納得して活動に取り組むことができた。簡単な指さしなどの合図で，自分から器具の準備ができるようになった。

〈事例3〉生徒C

- 実 態：ゲーム感覚で対戦するような運動を特に好み，張り切って運動するが，肢体不自由があり疲れやすい。運動に応じた力の調整がうまくできない。また自分が納得のいかないことがあったときには感情を抑えきれず，激しい乱暴な言動が見られることが多い。
- ねらい：集団での活動のルールを守り，楽しく運動する。
- 支 援：休みたいときはCTに告げることで見学していても良いと約束し，告げられたときは告げることができたことを褒めながら受け入れた。
- 変 容：休みたいときには休めるという安心感が本人に定着し，運動場面では張り切って取り組む姿が見られた。また，休んだ後自分で気持ちを切り替え，再び運動へ自ら向かう姿が増えた。

その他，生徒の実態に応じてサーキットを始める前に「今日は～周」と前時の振り返りを元に自分で目標を決める場面を設定したり，運動のポイントを伝えたりすることで，意欲的に取り組む生徒もいた。また，言葉かけのみで運動を理解することが難しい生徒も，サーキット運動の流れが原動力になって次々と運動を進めることができたり，運動能力の高い生徒がモデルとなり，今までできなかったボディボードのジグザグ走ができるようになったりした。

⑦まとめ

<成果>

- 器具を使った運動をサーキット運動にしたという工夫の上に、生徒の実態に応じた視覚的な支援や精神面の支援を行うことで、自ら運動に向かう場面が多く見られるようになった。また、サーキット運動の集団の流れが、さらに運動の意欲を高める効果につながった。
- 教員が生徒のがんばりの様子を他の生徒に伝えていくことで、生徒同士が友だちの特性を理解して、運動能力の差を認めあえたり、勝敗について友だちを責めることがなくなったりした。

<課題>

- 生徒の運動に対する「飽き」と繰り返しの取り組みによる「積み重ね」とのバランスづくりが難しい。
- 意欲面の評価が教員の主観に頼る部分が多い。評価の観点を決め、整理する必要がある。
- 全体的にゆっくりとした学習の流れだったため、運動能力の高い生徒に対する運動量の確保が難しかった。

【高等部】

①題材「ポートボール」（1月～2月）

②実態

男子13名、女子14名（内1名訪問生）の集団である。体育の学習は基本的に計26名全員で行っている。知的な発達段階に差があり、動きにぎこちなさのある生徒から部活動などの活動を通して競技スポーツへの意欲が高まっている生徒など運動能力面での実態は幅広い。また集団での活動に入りにくい生徒、情緒的に不安定になりやすく落ちついて活動に参加できない生徒、注意力・集中力が続かず指示が聞けない生徒など実態も様々で、コミュニケーション面での課題も多い。それらを考慮し、単元によっては種目選択制を取り入れたり、運動能力実態別のグループに分かれたりして取り組んでいる。

③題材設定の理由

「ボールを使った運動」は、高等部の生徒たちにとって仲間と集団で楽しむ、意欲的に取り組みやすい題材であると考え。運動能力面での実態の幅が広く、コミュニケーション面でも課題の多い生徒たちの実態を考え、「ポートボール」を題材に設定した。

ポートボールはゴールマンがボールをキャッチすることで得点になる。味方がボールをキャッチするという点で、多くの生徒に得点のチャンスがある。また、ボールや人を追って動くことが苦手な生徒も、シュート台に立つことで活躍ができる。実態差の幅広い生徒たちであるが、それぞれの生徒が楽しみ活躍のできる競技であると考え。

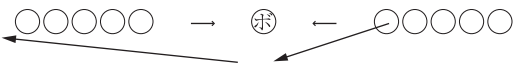
また、集団競技の中でも分かりやすい競技だと考えられる。チーム別に色分けしたビブスを身に付けることでチームは明確になり、『自分と同色のビブスのゴールマンをめざす』『同色のビブスの人にボールをパスする』という簡単なルールを理解することでゲームができる。よってルールの理解において実態差がある生徒たちにも、一緒にゲームをすることができる。

そして、味方同士協力してパスやドリブルでボールをゴールまで運ぶという特徴がある。プレーを通して、「相手を見て、相手の取りやすいパスを」という意識の定着や「チームのために」という集団の中で自己有用感や責任感といった役割意識を感じることができる。教員の支援を受けながらではあるが、1つのボールを通してコミュニケーションを図ることのできる題材である。

④題材のねらい

- ボールに慣れ、ルールを理解し、運動を楽しむ。
- 相手をよく見てパスやシュートをする。

⑤授業構成

	学習内容・支援等	生徒の活動
1 号令前	ランニング（ドリブルを練習しながら）	体育館を5周走る。個別目標をより多く設定する生徒もいる。
2 集合	号令	授業内容の説明を聞く。 活動内容と目標を知る。
3 準備体操	気持の緊張をほぐす言葉かけを大切にする。	筋肉の緊張をほぐし、ストレッチをする。
4 練習	ランニングパス練習	<p>声を出し、相手を意識し、取りやすいパスを出す練習をする。</p>  <p>パスを出したら対列の後ろへ走る。</p>
	ドリブルシュート練習	<p>声を出し、相手を意識し、取りやすいシュートをうつ練習をする。</p> <p>☆←（シュート）←⊕○←（ドリブル）←⊕○</p>
5 ゲーム	練習してきたことを意識する声かけをする。	5対5でのゲームをする。
6 集合	号令	良かった点を評価する。

⑥事例

<事例1>生徒D

<p>○実 態：運動の能力はある程度あるが、集団の中では気持ちの面で消極的になりがちで自分の力を発揮できない場合が多い。</p> <p>○ねらい：自分がどう動けばよいか理解し、積極的にボールにかかわる。</p> <p>○支 援：自信をもってプレイできるように、ドリブルして走るスピードやパス・シュートの遠投能力、意欲などが同等の生徒のグループを考慮した。パスを受ける場所やシュートをうつ場所をビニールテープの目張りで視覚化した。また、色つきコーンで守りや攻めのおよその位置やシュートやパスをする位置も視覚化した。シュートやパスをする回数が増えるように、具体的な言葉で指示をした。</p> <p>○変 容：パスを受ける場所に移動し、自分でドリブルで進みシュートを打ったり、パスを相手の名前を呼んで取りやすく出したりした。生き生きと運動する様子が増えてきた。シュートが決まったときの笑顔やガッツポーズが増えてきた。</p>

<事例2>生徒E

<p>○実 態：集団の中では、人とかかわることを苦手としている。かかわれる場面でも、上手く伝わらず攻撃的になったり、ボールを投げつけたりなどの行動をとることがある。</p> <p>○ねらい：相手に上手くパスをしたり、集団の中で役割を果たしたりする。</p> <p>○支 援：ボールがラインを割ったときのリスタートの球出し役は本生徒に任せたり、ゴール台でのシュートキャッチ役も回数を多くしたりし、ボールに触れる機会を多くした。</p> <p>○変 容：体育の授業で走って次の活動へ移ることの少なかった生徒が、自分で走ってゴール台やリスタート場所に向かうなど意欲的な場面が増えた。自分でシュートをキャッチしてゴールが決まると笑顔を見せる姿が増えた。</p>
--

その他学習計画では、繰り返しパスやシュートの練習を経て、次にミニゲームや形式的な攻撃・守備練習をして応用の動きを練習する、というように段階的に練習できるよう工夫した。この過程で特に大切にしたのは、生徒がパスの相手が変わっても同じようにパスができる、さらに相手に応じて取りやすいパスが出せるという相手を意識したプレーができるように、という点である。教員は、どのようなパスが相手にとって取りやすいパスなのかを「胸の前をねらって」「少し山なりで」など具体的な言葉で伝えたり、モデルになり例を示したりした。また、チームでの練習やゲームでは、相手（＝敵や味方）を区別して意識し、チーム内での自分の役割をチームメイトを見て判断して行動できるように、教員もチームの一員として加わり、モデルを示したり、どう動いたらよいかゲームの中で言葉をかけたりするようにした。その結果、生徒は基本的な動きを理解し、周囲の言葉かけやその他の指示を受けて動く、そして最後に指示がなくても自主的に動いて楽しむという流れができた。初め不安そうな表情だった生徒も、ボールに慣れて自信をもってプレーができ笑顔になるという場面が見られるようになった。

⑦まとめ

<成果>

- 基本練習を積み重ね技術的な向上から自信をもってパスを出せるようになった生徒が多く、集団スポーツとしての球技を楽しむ成就感の味わえる題材であった。
- チームメイトや対戦チームの生徒を意識して運動することができ、コミュニケーション能力の向上が見られた。コミュニケーションが苦手な生徒が多い中、相手の名前を呼んだり、顔を見たり、アイコンタクトをとるなど、言語的・非言語的な面でも変化が見られた。

<課題>

- 教員もチームの一員としてゲームに参加し個々の支援を行ったが、それぞれの生徒への共通の実態把握が十分でなく、ねらいを達成するための共通の支援ができていないところもあった。
- 体力の向上につながる運動量の確保ができるルールの設定を検討する。

4 研究のまとめ

(1) 研究の成果

本校は、現段階では各学部でのそれぞれの取り組みが中心になっている。また、年度によっては、生徒の実態が大きく変わることもあり、授業づくりにおいては、その年々の工夫やアイデアに委ねられるところが大きい。しかしそれぞれの学部において、よりよい集団づくりや、一人一人の課題を見つめ集団での活動を通して、自ら運動を楽しむ姿を引き出すことができたと考えている。また、学習を通して集団での楽しさやスキルを身につけたことで、学習場面以外でも運動に取り組む姿が見られたり、他者とのコミュニケーションがスムーズになったりする姿が見られている。体育で培ったコミュニケーションの力が他の生活場面で生かされていることも、大きな成果であった。

(2) 今後の課題

○適切な実態把握と集団づくり

学習を展開する中で、どの学部でも身体の発達段階やコミュニケーションの力、そして心の動きなど児童生徒の様々な姿を捉え、それらを考慮した学習計画や内容、環境設定を考えることが必要不可欠であった。今後も運動能力だけに留まらず、一人一人の様々な課題についても把握を行い、個々の運動能力が生かされるような集団づくりをしていきたい。その際、学級担任と授業担当者でスムーズに共通理解を図っていけるような体制づくりも考えていく必要がある。

○実態にあった運動量の確保

運動能力の高い生徒がさらに運動意欲を高めるためには、運動量の確保もできる種目内容を準備することも大切である。しかし、実態差が大きい集団ほど運動量の確保が課題に挙がってくる。今後も各学部とも児童生徒の実態差が大きくなるであろうと予測されるため、学部間の連携や協力により、柔軟な学習集団づくりも検討していく必要があると考える。